

張家口の崩れたレンガ塼

洲 浜 昌 三

ポプラの綿毛が雪のように舞う

五月の古都 北京

そこから汽車に乗って

北西二〇〇キロの町 張家口ジャンジャコウをめざす

そこは モンゴルとの国境の町

北の山並みに万里の長城が延々とびる町

八十歳の義母ははが義父ちちと過ごした青春の町

七月二十五日に生まれたばかりのあなたが

三週間後に敗戦をむかえ

はるか日本へ逃避行をはじめた町

義母ははの遠い記憶を求めて張家口ジャンジャコウの町を歩いて

満州鉄道病院の建物はどこにもない

「ここら辺に病院があつたはず」

新しくなつたビルの前に立っていると

仙人のような長い髯ひげの老人がやって来て言う

「このビルの裏に昔の病院があつた」

ビルの裏へ行ってみると

赤茶けて崩れかけたレンガの塼

戦争孤児にならず

日本海に捨てられず

今 五十五年ぶりに

生まれた病院のレンガと再会

「ふるさとに乾杯！」

缶ジュースを

五月の張家口ジャンジャコウの空高く掲げると

急にあなたの顔が崩れ

涙があふれて止まらない

(詩集『春の残像』より)